

真光院尊海と『あづまの道の記』について

鶴 崎 裕 雄

天文二年（一五三三）冬十月、仁和寺の真光院尊海僧正は、都をたつて遠江国^{あまだ}天方（静岡県周智郡森町）の知人の墓参と富士山一覽のため東国に下向、翌年春帰洛、「あづまの道の記」を著わした。今回、機縁あって、多少の調査を行なった。この機会に、作品について、作者について、次の要領でまとめておきたい。

まず祐徳稻荷神社祐徳文庫「桑弧」第八巻所収の「記行」（「あづまの道の記」）により、紀行の全行程を眺め、作品としての特徴や伝本の錯簡などを指摘し、次に尊海について、特に三条西実隆との交遊を中心に記し、最後に、尊海の足摺岬の金剛福寺別当兼務に關連して若干の考察を述べてみたい。

一 祐徳文庫本「あづまの道の記」

「あづまの道の記」は名の通った作品ではなく、作者尊海も、文

学史上、有名な人物ではない。これまでの研究には「群書解題」の井上豊氏の解題、井上宗雄氏の「中世歌壇史の研究 室町後期」（明治書院）などがある。

『国書総目録』によると、写本には国会図書館の「鶯谷雜記」「今古殘葉」「扶桑殘葉集」、宮内庁書陵部の「八州文藻」の各叢書にあり、蓬左文庫・神宮文庫にもある。版本には「詞林意行集」、活字本には「群書類從」「国文東方仏教叢書」「統帝國文庫」にある。

偶目した写本は、国文学研究資料館蔵の写本版によるが、彪考館「八州文藻」・同「統扶桑拾葉集」・蓬左文庫本・祐徳稻荷神社祐徳文庫「桑弧」である。いずれも大きな異同はなく、後述の、錯簡によるであろう誤りの部分まで同じである。但し祐徳文庫「桑弧」第八巻所収「記行」は、二・三、注目すべき異同があるので、その

全文を掲げ、右傍（ ）に「群書類従」(版本)との異同を示し、次節では調査した若干の事柄について報告する。なお、「あづまの道の記」は、散文による紀行というよりも、詞書と歌を日次順に並べた歌集ともいふべきもので、便宜上、各歌の詞書の上に番号を記した。また詞書には句読点を付した。

記 行

法印尊海 真光院

①天文二のとし神無月後の四日にあつまのかたへことのようありてくたり侍るに、はるかにみやこをかへりみて、

すみなれしみやこの空を別ては遠くなるまでかへりみるかな

②あふさか山をこゆるとて、

いつかへりいつあふさかの山ならんしられすしらぬ旅の行末

③からさきのまつをみて、のりをこえさるとしはかりなる法の師、あとにひとりいままんことをおもひて、

けふよりやおもひをしかのうらみてもまつはひとりのふるさと

の空

④ひえのやまのひかしさかもとにて、あめふりてたひ人もいてさりければ、そらもつれ／＼とこゝろうくて、

たひころもしほれそ初る神無月くるとはなきたゝ春の雨

⑤ふねのうへよりおほひえの雪をみて、ふしのやまをおもひいて、

浪のうへのをひえの雪の面影にまたみぬ山をおもひやる哉
⑥木のはの奥舟(舟)のうちにて同道の人いひすての発句所望しければ、とりあへず、

さゝ波やたゝむ木の葉の奥津風(舟)

うらはの山をしくれゆく雲 盛 記(奥)

をちかたの空に声たつ声さえて 五郎四郎

⑦しまの郷といへるところにとまりて、

みやこ出て新嶋もりのかりまくら夢はかりこそ行かへるらめ

⑧つくまといへるさにて、みちにくだひれぬれば、かれいひいそけとも、やとのあるしそのことなければ、

とくせなんつくまの里のはたこ飯つれなき人はなへもたかすや

⑨あさつまのうらにとまりて、その朝おき侍りて、

みし夢のあさつま舟やたちかへりなみたはかりを袖にのこして

⑩さめか井のさにて、たくらうといへるをのみて、

あしけれとのみてなをさん二日酔けふさめか井の水くさき酒

⑪日はてりながら伊吹かたけを見れば、うちくもり、さながらゆきのふるけしきをみて、

さえさゆる空は日影のさしなから伊吹おろしや雪とふるらん

⑫不破の関屋のあれけるをみて、

板ひさしまはらになれは山風のふはの関もる月そさむけき(不)

⑬たる井の宿にとまりて、その夜のあらしはけしくて、朝こほりはしめてむすふをみて、

さ夜風のつもる木のはの下くゝる水のたる井のうす氷かな

⑭いなのは山のふもと井のくちといへる所に一日とうりうし侍は、友なひし人の世にはかなくなりしよしひ侍れとも、まことしからねは、まかりてとはむとおもへは、^(ふじ)しる人^(しかく)ことのよしをかたれは、

世の中を人はいなのは嶺に生る松や中／＼はかなかるらん

⑮おはりの國やなといへる所に一夜をあかし侍れは、そのさといいつくしきわか衆ありけり。さけなとたふへて、そのあしたおきわかれければ、

梓弓やなのさと人一すちにおもひわかるゝ横雲の空

⑯てんかくかくほといへる野を行は、やまたちいつるよし申て、いふせくおとされて、^(れ)

あふりたる山たちともか出合てくしやしやせんてんかくかくほもりやまといへるところにとまりて、旅ねいとさむければ、^(か)

もり山の里の名におふ宿なればさ夜もすからに袖そしくるゝ

⑰やはきのさとをかききといへるところにとまり侍りて、よしある事あれば、さやうの事おもひいてて、

武士のやはきの里の跡とへはむかしになりてしるよしもなし

⑱いまはしといへるところにとまりて、うき世のことゝもおもひつらねて、

人なみにたゆたふことはいにしへもうき世わたりのかゝる今は

し

⑲遠江のくに浜名のはしのあたりに留て、^(なり)

行末はさそな心もつくはねのみねと浜名の橋にかけきや^(は)

⑳引間といへる所に泊て、^(こ)

しるへして袖を引間の野を行は萩や尾花の霜のふり枝に^(せ)

㉑あまたにしる人あれば、そこにおちつきて、しはしあしなとや

すめ侍れは、道芬居士発句所望あれば、かの尊翁に応して、霜月

廿一日に、

色みえて句はぬ花か木々の雪

さえて風なきまつ朝あけ

打むかふ遠の山の端長閑にて

㉒山内刑部少輔館にて一座興行、

つきてふれ雪や都をわすれ草

冬に色かる宿の梅か枝^(あ)

春さむき月に鶯なき初て

㉓みやこにてなれし人、このところにくたりて身まかり侍れは、かの

の廟所にいたりて、松風さひしく吹ければ、

なれ／＼し人よいかにとことへはこたふるはかり松風そふく

㉔彼庵主かへし、

都よりしほれこしてもしほるらんなきか跡とふけふのたもとは

㉕庵主侍は、山家さひしからむとて、つね／＼とひ給ふ人に、

みやこより住よかりけりおく山のころをしればさひしさもなし

㉖また庵主返し、

みやこ出し心のまゝのころかはまた山里をうしとおもはぬ

㉗これよりふしみるとてたちいてけるみちに、原といへるところに、庵に手ならふ人の里あれば、そこにいたりて夜もすからわかし人たちとことかたり侍りて、

夢うつ／＼何とさためむかり枕かはすことはのうちに別て

㉘おなし家のあるし、るかけなといひつけ侍れば、何となく心のおおかしくて、

おもひきやにこらぬ物をわか心けさしも何にいもあせよとは

㉙これより懸河といへるところにゆきて、しる人を尋ねければ、あはぬをうらみて、

うらみこしくすてふぬのをかけ河のかゝるもほさぬ涙なりけり

㊱またこのころにて、夕くれさひしくて、はるかにみやこのかたを見をくりて、

こゝにきて日の入かたをなかめやる山よりにしや都なるらし

㉚夜の山をこゆるとて

たちかへりいつか越なんとはかりもたのめをきけりさ夜の中山

㉛菊川の宿をとるとて、

冬かれの山路の草もうつろへる霜のした行菊川の水

㉜岡部のさとをゆくに、かたらふへき友もなければ、そくか

をし霜のをかへの里に友もなくひとりすきかての杉の下道

㉝うつ／＼やまをこゆるとて、

いかなれはうつ／＼の山とはむは玉の夢よりいひし名にや有けん

㉞大井川をわたれば、みやこのあたりにおなし名あれば、それさへゆかしくて、

みやこにしかよふ心のおほ井河名にたつ浪はかへりもやる

㉟木からしのもりのあたりくすみといふところに寺あり。そこにとまりて月のかけさむきをみて、

川なみもさえ行まゝに山のはの月にさはらぬ木からしの森

㊲しつはたやまに浅間大井のみやあれば、それへまうてゝ、かへるさのみち、雪のうすくちるをみて、

からころもしつはた山にをりかくる時雨や雪の下染ならん

㊳選江にてみしよりも、いまするかにてふしをみれば、なをまさりて、

朝夕にいくたひななめこしよりもちかまきりする雪のふしのね

④三川の国八はしのむかしをとふに、からころものうたあはれにおもひいて、

ことのはの種しとそなる杜若かけし衣のゆかり恋しも

④鴨海の浦に出て月をみて、

山の端のかすみ^(め)をいつるほとみえて月になるみの浦しつかなり

④星崎のうらはるかに見わたして、

春の夜のうみに出たる星崎のほかにみやる浦の^(ゆ)とし火

④都へかへる事うれしくて、

みやこへとひなの長路を立帰^(る)り霞のころもにしきなりせは

④春雪といへる題にて、

ふるとみえて^(て)積りもそせぬ春の雪の庭の本草にあまる露かな

④十四日立春なれば、

山はまたかすむともなき朝より人のこころの春やたつらん

④これよりのほりぬれば、道芬^(老)離別の短冊^(老)を路次^(老)てをくりたまふ、

人そあるえやは又とも契をかん老の行ふのけふのわかれは

④やかてつかひに返し、

老のなみたち別^(て)とも友ふねのあふ瀬を又とたのめぬる哉

④この返歌にそへてたちなれし人^(も)のかたへ、

おもひたちし旅よりそうきかり枕あまたなれにし宿の別は

④うらつたひしては^(こ)かへるとて、富士のけしきのおもしろきを見て、

旅ならて見まくほしきは富士のねの曙ゆくなみの月雪のうら^(金)

④これよりのほり待るに藤枝長楽寺と云ところに善福寺^(徳)あますほと

に、たちよりぬれば、和漢一折興行、発句所望あれば、

ゆきやうて花や春まつ宿の梅 喜卜

友 三 話 歳 寒 九英

扣 氷 茶 煮^(煎) 月 華徳寺 承芳

⑤またこれより遠江天方道芬^(老)庵へ帰^(りて)とし年をこし待るに、明年の二日、子の日なれば、

けふといへは野への小松のうらわかみねの日に千世を引ためしかな

⑤同七日に若菜の題にて会興行、

なへて世のけふの若菜にことのはのなくさめ草やつ^(もり)みもそふらん

⑤十二月十八日の夜、於中御門に一座御興行、発句申せとの仰^(せ)なれは、

明ほのゝ雪のうへみん山もなし

月にいろそふ松のさむけさ 中

鷹かねもこほる嵐のさ夜更て 蔵

②同廿三日夜、月待に又一折、

ふる雪のつもるや年のすゑの松 中

山かせさむみ樹のあさあけ 蔵

いる雲を忘るゝ月の影すみて 喜卜

③清見が関にいたりて、これよりおくへはゆかさりければ、

心よりこゝにさそはれきよみかたせきとめらるゝ波のあらかき

④これより三保のまつはらをはるかに見をくりて、

朝なきのあまの小舟もほのゝとみほの松原波やくゆると

⑤ふるさとに帰る心をとかひなよにしきにまさるゝすみのころもは

⑥しらしかし水のうへ行かつほむし我あしふみにならふ心は

二 「あづまの道の記」の二・三の報告

紀行の行程に従い、国ごとに詞書の番号・地名（現在地名）を記す。

山城 ①京都 天文二年十月二十四日出発。

近江 ②逢坂山（滋賀県大津市逢坂）、③唐崎（大津市下阪本町）、

④東坂本（大津市坂本本町）、⑤⑥琵琶湖渡船、⑦しまの郷 蒲

生郡奥島庄の中心であった島村か（近江八幡市島町）、⑧筑摩（坂

田郡米原町筑摩）、⑨朝妻（米原町朝妻）、⑩醒井（米原町醒ヶ

井）、⑪伊吹が嶽（坂田郡伊吹町）

美濃 ⑫不破の関屋（岐阜県不破郡関ヶ原町松尾）、⑬垂井の宿（不

破郡垂井町）、⑭稲葉山麓井口（岐阜市、金華山の麓）

尾張 ⑮やな（愛知県丹羽郡扶桑町山那）、⑯田楽窪（豊明市杣掛

町）、⑰もり山の里 田楽窪より一旦北に戻ることになる。尊海

の誤か（名古屋市守山区）

三河 ⑱矢作の里（岡崎市矢作町）、⑲今橋（豊橋市）

遠江 ⑳浜名の橋 浜名湖から遠州灘に流れる浜名川にかかつてい

た橋、明応七年（一四九八）の大地震で今切の渡となつた（静岡

県浜名郡新居町）、㉑引間（浜松市）㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟

森町大島居）、㉞㉟原（掛川市原里）、㊱㊲懸河（掛川市）、㊳

小夜の山（掛川市佐夜鹿）、㊴菊川の宿（榛原郡金谷町、小笠郡

菊川町ではない）

駿河 ㊵岡部の里（志太郡岡部町）、㊶宇津の山（静岡市宇津ノ谷）、

㊷大井川 菊川の宿の次に位置する、尊海の過誤か（金谷町と島

田市の間）、㊸木枯森のあたりくすみ 木枯森は静岡市内葵科川

のほとり、くすみは静岡市大字羽鳥字久住に比定（角川日本地名

大辞典）、または同市楠谷見性寺か、㊹磯機山 浅間神社（静岡

市）、㊺駿河にて 駿府滞在中か（静岡市）

次で㊻以降には、錯簡によるであろうと思われる配列の誤りがあ

る。冒頭に述べた如く、偶目した写本は総て同様の誤った配列であ

るので、かなり古くに錯簡があったものと思われる。以下、誤りを正し、順序を改めて記す。^{註2}

駿河 ⑤③駿府 十二月十八日、中御門宣綱は大永七年(一二二七)

以後しばしば駿府在国、今川義元の母寿桂尼は宣綱の伯(叔)母にあたる(静岡市)、⑤④④清見が関(清水市清見寺町)、⑤⑤藤

枝長楽寺(藤枝市)

遠江 ⑤①④④④④④④天方 天文三年正月二日、七日、十四日(周

智郡森町大鳥居)

三川 ④④八橋(愛知県知立市)、④④鳴海の浦(名古屋市緑区)、④④

星崎の浦(名古屋市緑区)

上洛途上 ④⑤⑤⑤ 最後の二首⑤⑤には詞書がない。はじめ⑤①と同

じ時、清見が関で帰洛を思ふ歌と考えたが、⑤⑦の歌の右肩の祐徳

文庫本だけにある傍注「サカヨリ」を逢坂山と考えて、逢坂山よ

り都を望む詠歌とした。如何か。

紀行の中、詠まれた歌については、その多くが狂歌または狂歌風であることに留意したい。例えば、⑧近江の筑摩での、

とくせなんつくまの里のはたこ飯つれなき人はなへもたかすや

は「伊勢物語」百二十段の、

近江なる筑摩の祭とくせなむつれなき人の鍋のかす見む

の本歌取りというよりもパロディというべきものであり、⑮尾張の山那での、

梓弓やなのさと人一すちにおもひわかる、横雲の空

は、山那の「や」を「矢」と取りなして一筋の思い別かると「新古今集」巻一(三八)の、

春の夜の夢の浮橋とたえて嶺にわかるゝよこ雲のそら

を本歌取りにしたものであり、次の⑯田楽窪での歌は、山立(山賊)の恐怖を田楽焼の串ざしの笑いに変えている。

⑰今橋での、

人なみにたゆたふことはいにしへもうき世わたりのかゝる今はしは、狂歌ではないが、「なみ」「たゆたふ」「浮き」「渡り」「かゝる」「橋」の縁語、「かゝる」は「橋が架かる」と「斯かる」の掛詞というように、技巧に技巧を重ねたものである。

人物については、次の二か所の人物に注目したい。まず船路、⑮駿河の藤枝長楽寺において和漢一折を興行した善徳寺承芳と九英である。「群書類従」には長閑寺とあるが、長楽寺が正しい。長楽寺は藤枝に現存する臨済宗寺院である。祐徳文庫本には善福寺とあるが、第三句の承芳の傍注善徳寺が正しい。善徳寺承芳は後の今川義元その人である。この時(天文二年)には家督を継いだ長兄氏輝が健在で、義元は出家しおり、駿河国瀬古(富士市)の善徳寺にあって

て梅岳承芳といった。十五歳。後、天文五年、氏輝が没すると、異母兄惠探と家督を争い、惠探派を破って（花倉の乱）家督を得た。

「為和集」（私家集大成 中世Ⅴ 明治書院ほか）には、天文二年に「十二月十日、於禅徳院詠歌、当座之詠也」とあって、「橘霜」の歌を載せる。禅徳院は善徳寺と同じであろう。歌合の後、十二月中旬ごろ藤枝長楽寺にあって尊海と和漢を巻いたのである。^{註3}

脇句を詠む九英は九英承菊、後の大原雪斎、この時は三十八歳。義元が家督を継ぎ、領国経営を進めると、これをよく助け、自からも出陣して織田信秀を破ったこともあった。

次に往復の②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿の遠江の天方に見える道芬居士・山内刑部少輔たちについて考えてみたい。天方における知人の墓参は、富士山一覽とともに、尊海のこの紀行の目的の一つであった。山内氏は天方・飯田（ともに周智郡森町）に勢力をもった国人領主であって、^{註4}「崇徳寺縁起」には、応永初年、山内対馬守道美なる人物が天方城を居城にしたとあるという。「寛政重修諸家譜」巻八二九 秀郷流青山氏の項に、

通季 ^{又三郎 山崎守} 正少卿 山崎守 通植 ^{四郎 民部少輔 三河守} 法名道分 号政雲院 号長泉院

とある。また森町大島居にある松岩山藏雲院に伝えられる天方（山内）氏の位牌に、当院開基明室道分大居士・天叟夕雲居士・崇果院殿正眷員悦禪定尼・円相院殿珠光道的大居士・天岩高晋居士・梅窓

院殿先大府香替浄意大禪定門の六人の法名が見える。

実はこれまで「群書類従」によって「あづまの道の記」が読まれていたため、尊海が尋ねた道芬居士は「道芝居士」とされており、藏雲院道分とは全く別人物と考えられていた。しかし、ここでは、道芬居士と藏雲院道分は同一人物と考え、大島居に現存する藏雲院の開基と見てよからう。本稿で祐徳文庫本を取り上げた理由の一つは、このように地元や江戸時代の家譜に通ずる「道芬」が正しく書きされていることによる。更に「道芬」が正しいことは、三条西実隆の「実隆公記」天文三年二月十六日条に「遠江道芬^号天方 椎茸一袋・茶五袋送之」とあって、明らかである。^{註5}

山内刑部少輔は、天方の国人領主山内氏の一族であるが、それがいかなる人物か不明である。「寛政重修諸家譜」の通季（道分）の次の通植あたりに当たるかもしれない。

現在、森町を流れる太田川左岸の向天方の城ヶ平の頂上部一帯に天方城跡がある。しかしこの城跡は、長倉智恵雄氏の説明によると、武田氏入部以後とわかる遺構があつて、天文年間よりも時代は降るようである。むしろ大隅信好氏が指摘されるように、天方城跡の北西の麓から太田川の支流吉川を渡った大島居には、藏雲院や長泉寺といった中世寺院や遺跡があつて、地形から見ても国人領主層の居館に相応しい地域である。尊海はここに滞在して連歌を巻き、歌を

贈答したのであろう。

三 真光院尊海年譜稿

「あづまの道の記」の著者尊海の生涯を、左の資料によって年譜（次の別表）にまとめてみた。

- ① 尊卑分脈 国史大系六〇 昭41 吉川弘文館。
- ② 仁和寺御伝 真光院本ほか 奈良国立文化財研究所史料第六冊 仁和寺史料寺誌編 昭42 吉川弘文館。ほかに群書類従。
- ③ 仁和寺諸院家記 恵山書写本ほか 奈良国立文化財研究所史料第三冊 仁和寺史料寺誌編 昭39 吉川弘文館。
- ④ 石山座主伝記 石山寺宝蔵 寺誌七。
- ⑤ 新撰菟玖波集 作者部類 「新撰菟玖波集」昭45 角川書店。
- ⑥ 実隆公記 続群書類従完成会。
- ⑦ 石山寺年代記 石山寺宝蔵 寺誌一。
- ⑧ 石山寺の研究 校倉聖教 古文書篇 昭56 法蔵館。
- ⑨ 高山寺経蔵典籍文書目録 高山寺資料叢書 昭48 東大出版会。
- ⑩ 詠百首和歌（尊海）中世百首歌一 昭57 古典文庫。
- ⑪ 摂州畑天満宮法楽 先代御便覧二四 宮内庁書陵部蔵。
- ⑫ 再昌草 私家集大成七 昭51 明治書院。
- ⑬ 雪玉集 私家集大成七 昭51 明治書院。

⑭ 嵯陀山縁起奥書 金剛福寺蔵尊海自筆本・群書類従ほか。

⑮ 後奈良天皇宸記 宸記集上 昭49 芸林社。

⑯ 仁和寺殿院家真光院尊海（動遷）沙門（一巻） 土左国古文書 高知県史（古代中世）史料編 昭52。

⑰ 金剛福寺要録 長崎勝範著 金剛福寺蔵。

⑱ 金剛福寺繰出過去帳 金剛福寺蔵。

年譜は最上段より、年号、尊海年齢、尊海事項（下部に「実隆公記」中、尊海及び関連の記載月日を示す。月に○を付したものは閏月、□で囲んだ月日は「再昌草」中の記載月日を示す）、「実隆公記」の存在（「実隆公記」は一部欠本。斜線部は存在を示す）、関連事項の順に記す。

年譜の如く、尊海は、前右大臣（のち太政大臣）久我通博を父として生まれ、十一歳で仁和寺に入り、二十一歳で法印に敍せられた。石山寺座主となったのはこのころであらうか。清華家の出身であり、若くして高位に就いた。これ以後、明応四年、二十五歳のころより三条西実隆との交遊が頻繁となる。次に「実隆公記」を通して尊海像を眺めてみたい。

四 「実隆公記」に見る尊海像

「実隆公記」における尊海の初見は明応四年二月二十一日条である（「実隆公記」は明応三年三月から十二月にかけて欠本となっている。この間に尊海との交遊は始まっていたかもしれない）。時に実隆四十一歳であった。即ち、

真光院石山来入、二荷両種被携之、先度石山勸進帳草并清書事予沙汰之、被謝彼儀也、不慮之青情一喜一懼也、勸一盡、暫言談、とある。尊海が実隆に石山寺の何かの勸進帳の草稿と清書を頼み、その謝礼に二荷両種を持参したのである。「実隆公記」には尊海が実隆の許にたび／＼贈物をしている。二、三、その例を示す。

（明応四年八月七日）午後真光院来入、茶甘袋被携之、数刻雑談、勸一盡、

（文亀元年八月十六日）真光院僧正来臨、綉段文字二幅被持来、言語道断殊勝物也、鄭伯衣贈之字有繒、奇異之珍奇也。

（永正六年十月七日）真光院僧正携一桶・食籠等来臨、盃酌、
（大永三年六月八日）真光院太布一・厚帟三帖・雜帟十帖被惠之、

（享祿二年十月十二日）召庭者立石、栽替樹、南天竹昨日真光院被送之、今日栽之、

このほか、種々の贈物がある。植木まで贈られているのが面白い。

尊海自身のことについて、年譜の事項を裏付ける記事が見える。

例えば、明応六年三月二十五日の甘露院における入壇・灌頂には、
（明応六年四月三日）真光院来臨、灌頂無為無事大慶之由被称之、

明応七年九月十一日の権僧正の補任には、

（明応七年九月十九日）真光院来入、去十一日極官事勅許、明日（云）御礼可参内云々、
などの記事がある。

石山寺に関しては次のような記事が見える。まず一切経について、

（明応五年九月五日）真光院所望石山經藏一切経補欠分書写勸進帳草持来之、一覽可然之由報之、暫言談之処、帥卿（三森四公也）来入、同雑談、

（同年九月七日）勸進沙門敬白、

請特蒙十方諸檀芳助、書写加江州石山寺一切経不足分、補全部欠如状、

（略）

右石山座主真光院尊海法印所望之間、課師富朝臣令草之了、今日到来、翌朝遣真光院了、

（明応七年二月廿八日）石山一切経内宝篋經上立筆書之、

年号 年齢	尊海事項	(実隆公記・再昌草 記載月日)	実隆 公記	関連事項
文明四 1	誕生、父前右大臣久我(東久世)通博①②③			
五 2				
六 3				
七 4				
八 5				
九 6				
十 7				
十一 8				
十二 9				
十三 10				
十四 11	是歳仁和寺入室②④			
十五 12	2月出家、戒師守誉僧正、直敍法眼②③④			
十六 13				
十七 14				
十八 15				
十九 16	12月転正僧都②			
二十 17				
二十一 18				
二十二 19				
二十三 20				
二十四 21	敍法印②③④、この歳石山寺座主となるか			
二十五 22				
二十六 23				
二十七 24	新撰菟玖波集奏覧、一句入集⑤			
二十八 25				
二十九 26	於甘露王院入壇、大阿闍梨静覚法親王(後光台院御室)②③④			
三十 27	任権僧正②④⑥			
三十一 28				
三十二 29	丹後国久世より実隆に書状⑥			
三十三 30	正月灌頂式於宗源律師⑦			
三十四 31	是歳石山寺経蔵本奥書「文亀三正虫払了 尊海卅二歳」ほか⑧			
三十五 32	二宮御方(後柏原天皇第一皇子)入室につき実隆と相談⑥			
三十六 33	空忍律師石山寺一切経修復、その目録に奥書④			
三十七 34	実隆に瀬田橋勸進帳書写依頼⑥			
三十八 35	是歳高山寺蔵沢見と奥書「于時永正第五係嗣尊海」⑨			
三十九 36				
四十 37				

[illegible]

(同年三月一日) 石山一切経内宝篋經上入夜終書写功了、

右の明応七年の実隆の一切経書写については、石山寺一切経第二十

四函五十一大方広宝篋經卷上の奥書に、^{注6}

明応^(七年)戊午九月十八日以東福寺大藏之唐本書写之

從二位行権大納言兼侍從藤原朝臣実隆 四十四歳

法名堯空(花押)

とある。同第二十七函三十七仏地経論卷第七の奥書には、

余隨于当寺之座主尊海僧正錫投此地矣、一日金輪房謂余曰、当

当寺之一切経因跣徒偷却欠矣、故令十方僧衆補欠、余亦備員則

幸也、漫応備書右卷恐有烏焉馬之誤、時明応八年己未結制日晨、

洛東建仁僧 良秀 敬白

とあって、一切経補欠のため尊海は広く各界の人々に働きかけていたことがわかる。

実隆は「石山寺縁起絵巻」にも筆を染めている。梅津次郎氏の

「石山寺縁起絵について」等に詳しい。^{注7}

(明応六年四月七日) 自真光院石山絵一卷被送之、可書詞之

由、先預置之者也、

(同年十月九日) 及晩石山絵詞立筆、

(同年十月十一日) 石山縁起絵詞終書写功、雲龍院入来、彼詞

書写最中之間不歸之、

この他にも、尊海は、石山寺に関する種々の勸進帳などの書写を頼んでいる。

(明応六年十二月四日) 抑石山経藏額今日遣真光院了、

(永正五年十月十七日) 勢多橋勸進帳書之、依真光院所望也、

(享禄元年十月卅日) 真光院来臨、差晚炊閑談、帋二帖被恵之、

石山勸進帳事等所望、

(同年十一月十八日) 石山勸進帳書之、(略) 真光院来談、

最後の石山勸進帳については、石山寺勸進帳 古文書第一部二八

「享禄元年十一月日」の包紙表書に「勸進疏 三条西追遠院殿筆」

とある。^{注8}

仁和寺に関しては、石山寺のように勸進帳の書写といった記事で

はなく、もっと政治搦みともいうべき記事が見える。その主なもの

は、一 後柏原天皇第二皇子寛道法親王の入室、二 理澄院光誉の

大僧正補任、三 仁和寺領の経営の三点である。

まず寛道法親王の入室、これは文亀三年七月十五日、第十八代後

光台院御室静覚法親王の入滅により次の御室の入室が問題となった

であろう。そして後柏原天皇の二宮(第二皇子)が御室の候補者とな

った。永正元年に二宮入室のことが初見する。二宮はまだ五歳の

時である。即ち、

(永正元年二月^(猶欠未三日か)) 又就二宮御方事仁和寺宮御^(門)徒中不可存

疎略之由女房奉書可被出之間事、真光院僧正申請之、其案文同染筆了、

(同年二月八日) 真光院僧正來臨、今日二宮御方御入室間事、門徒中不存等閑可申沙汰之条々^②女房奉書被仰彼僧正許、又以予消息申遣真光院僧正許了、

とある。仁和寺の中には後柏原天皇の二宮の入室に同意しない者もあって、尊海はそれらを纏め、一方では朝廷との交渉を進めねばならない。実隆は相談にあずかり、交渉を助けている。

(永正七年二月十日) 真光院御室御入室事今日被申定之、

(同年二月廿日) 真光院僧正・恵命院等来、二宮御入室事来廿

五日延引、来廿八日歟、来月五日歟云々、委細有被談之事等、

不録筆端矣、

(同年三月十二日) 二宮御方入夜渡御、新典侍局御供也、隆康朝臣奉抱之、源諸仲在御供、柳二荷、御土器物被持之、不慮之事也、故奉御盃、則頂戴、明日可有御入室也、可有御窮屈之間不及献之沙汰也、

三月十三日、二宮の仁和寺入室が実現した。その前日、三条西邸に渡御が行なわれた。実隆にとってまことに名替な出来事である。

入室について実隆の尽力を示している。この後、二宮覚道法親王の得度、親王宣下が、次々と計画され、実現する。

(同年七月十九日) 真光院僧正來臨、閑談、二宮御得度事来月御嘉例之間、内々存企之由被談之、珍重、

(同年十二月廿六日) 今日仁和寺宮^{当今第二宮、御母新典侍、十二才}御得度、戒師尊海僧正、唄光誓大僧正(略)

(永正八年三月五日) 真光院僧正來臨、御室親王宣下事被相談之、

(同年三月廿一日) 真光院有使者、御室親王宣下事被談之、愚意分答之、

(同年三月廿五日) 仁和寺宮^{今上第二宮、十二才、御名字覺道}親王宣下事可為明日、奉行職事藏人左中弁伊長、上卿中御門中納言立秀也(略)

(同年三月廿六日) 自真光院有使者、今日宣下官務祿物事等被相談之、

かくして仁和寺は覚道法親王を頂き、尊海も安穩に余世を送るべきであつたらう。大永元年または二年ごろより尊海が土佐国足摺岬の金剛福寺の住職を兼務して都を遠く離れた南海の岬に移るのも、仁和寺安泰という思いからであつたらう。しかし思い通りにはならず、大永七年十月二十三日、覚道法親王は二十八歳で入滅する。

(大永七年十月廿三日) 抑仁和寺二品親王覺道終以戊剋御入滅、廿八才、可惜々々、

年譜でもわかるように、この後、尊海は再三、京都・足摺間を往

復する。次の御室の人選が行なわれていたのであろうか。十二年後、伏見宮貞敦親王の第四王子で、後奈良天皇の猶子である任助法親王を仁和寺に迎え、天文八年に出家、同十一年に灌頂が行なわれる。戒師・大阿闍梨ともに尊海が勤める。実隆はこれより以前、天文六年に亡くなっており、「実隆公記」は天文五年に終っている。

理證院光誓の大僧正補任については次のような記事である。

（永正七年十二月七日）真光院僧正申光誓僧正転大事、同申入之、

理證院光誓僧正轉正漸涉歲月候、就今度御得度所役転大事望申候、年齢迫七旬有余之類暮、一流伝法之大阿闍梨耶候、為贈内府綱光公猶子、侍賢主四代之襯席候（略）此趣内々申御沙汰可畏入候、尊海恐惶謹言、

十二月三日

尊海状

今日伺申入之处、則勅許、宣下事申遣右頭中将実胤朝臣了、僧正が年功を積むと朝廷より大僧正に任ぜられる。尊海自身も天文十一年、七十一歳にして大僧正に任ぜられているが、このように先輩のための補任の手続きや交渉も行なわねばならない。

仁和寺領については、次のような記事が見える。

（永正二年八月廿五日）真光院僧正就御室御領九条勅旨田代官職事有被申之子細、夜前内々伺時宣、今日書遣書状了、

（永正三年六月廿三日）（能登國）抑相応院門跡領事、真光院僧正有申旨、仍勅裁事今日伺之、翌朝令書遣之、案文頭中将加符案、件状統奥、

（永正五年十月二日）真光院僧正来臨、御室御料所武家御下知事女房奉書被申請之、其間事愚意分申了、

（同年十月廿六日）真光院僧正入来、西五条事猶有違乱族云々、就此事予遣使者於大田藏人、有申旨、不能記之、

（永正七年正月廿四日）真光院僧正来臨、御室御領西五条田事（若殿、飯尾善左衛門）自細川西使、申中川借書子細事、於此亭可令聞云々、如法無骨之儀也、雖然無力於此亭問答了、子細不録之、

（同年十二月七日）抑御室御領西五条事落居、年貢收納云々、珍重云々、

ここに見る仁和寺領については、具体的にあまりよくわからない。九条勅旨田・相応院門跡領はともに朝廷の勅裁を必要としている。西五条領が武士の違乱にあつて幕府に訴えた。記事の書き振りがから交渉ははかばかしくなかったようだが、最後に「西五条事落居、年貢收納云々」とある。朝廷に対しても、幕府に対しても、実隆が仲介している。この後「実隆公記」には仁和寺領に係わる尊海の記事は見えない。年とともに所領関係の事務は他に委ねられたのか。当然のことながら尊海と実隆は文芸や古典において深く結ばれて

いる。

(明応八年五月晦日) 真光院僧正所望之伊勢物語立筆了、
(文龜三年四月五日) 自真光院僧正許古文字、大字、篆字等之類五卷被見之、言語道断絶代之奇珍也、則備叙覽、

(大永八年七月十九日) 真光院僧正入来、石山卅首歌被持来、

伊勢物語外題所望、

(享祿二年三月九日) 今日石山法樂百首披讀、午後各来会、四辻大納言・三条重相・甘露寺中納言・左衛門督・新中納言・中院中納言・真光院僧正・理覺院・周桂・宗牧(略)

(同年三月廿日) 今日夢庵追善和歌披讀、午後各来会、四辻大納言院師・三垂・甘黄・左衛門督^{金吾歌}・新黄庭・中院・範久朝臣^{發聲}・理覺院^{金吾歌}・此亭之衆三人・真光院僧正・重吟・周桂・宗牧等也(略)、

(享祿三年九月 再昌草) 土左国より真光院僧正文をこすとて、古今集不審の事ともとふらはるとて、

身は老ぬよしなし今はかゝらしとおもへとも猶わかのうらなみ

返事

和歌のうらによせし心のなこりに跡なき老の波をかなしき

(天文三年四月廿五日) 今日予生日、帥為賀八十□□十首歌取重之、午後披讀、四辻前重相、^{此字兩人}飛鳥歌^{發聲} □□、高倉三位・頭中將

院師・真光院僧正・西□□・宗牧・景範・織田□□等来(略)、
和歌や連歌や古典研究は當時の上流階級の当然の嗜みである。こ
うした嗜みから「あづまの道の記」が書かれ、次節で述べる「塵毘
山縁起」が著わされたのである。

その他、注目したいのは近衛・徳大寺両家の確執を調停している
ことである。

(大永三年八月廿三日) 陽明・徳大不和事、依真光院入魂、今
日先遣書状於東方申試之、真光・師象朝臣等来、

両家のこの確執が何に原因し、どのような結末となったか、よく
わからないが、当主近衛尚通の室が大徳寺家出身であるだけに、深
刻な問題であつたと思われる。

以上「実隆公記」を通して尊海像を眺めたのであるが、石山寺・
仁和寺の寺院運営に励み、朝廷や公家社会と親しく付き合い、和歌
や古典を嗜む高僧の姿が見受けられる。太政大臣を父とし、若くし
て法印・僧正の位を授かり、石山座主に就いた出自の良き、加えて
尊海自身の能力・才能がこのような人間像を形成したのであらう。
しかしこのような人間像は、当時の貴族出身の高僧にはよく見られ
るのであつて、尊海が秀でているというのではない。

尊海の特異、それは都を遠く離れた南海の岬、足摺岬の突端にあ
る足摺山金剛福寺の住職(別当)を兼務し、そこを入滅の地とした

ことである。

五 足摺山金剛福寺

足摺山金剛福寺は、土佐國幡多郡足摺岬、現在土佐清水市にある真言宗寺院、四国八十八ヶ所の第三十八番札所である。

尊海は大永二年ごろ、金剛福寺住職（別当）を兼務して足摺岬に赴いている。「再昌草」大永二年七月には次のようにある。

飛鳥井少將頼孝、土佐畑より文のつるにて

すて小舟よるへの磯はとをくともかへる波ちにあはんとそ思

返し

老の波我を捨舟いつまでかかへりくるをもまたんとすらん

あら磯のよるへもしらぬすまひにも心をかけよ和歌のうら波

真光院僧正、おなし所より文をこせたりし、足すりといふ山

寺にすみわたられしかは、申つかはし侍し

とゝまるも程はあらしと待そみるひま行駒の足すりをして

しかも「実隆公記」大永元年には尊海は見えないので、大永元年

には土佐に下向していたかもしれない。右「再昌草」の飛鳥井頼孝

は雅康（宋世）の子、晩年を土佐國幡多郡で過し、土佐一条氏を頼

っていたようである。^{注9}

土佐一条氏は一条教房を初代とする。教房は、兼良の嫡子、長祿

二年（一四五八）関白となったが、応仁の乱に家領土佐國幡多庄に下向、在地國人衆に迎えられて居館を構えた（中村市）。京都の一条家は末弟で養子の冬良が継ぎ、土佐一条氏は戦国大名化の道を通じて、伊勢北畠氏・飛騨姉小路氏とともに「三國司」と称せられる。大永年間、土佐一条氏の当主は二代房家である。

土佐下向以前の尊海の旅行について見ると、いずれも「実隆公記」に、

（文亀元年三月廿二日）自真光院僧正參詣丹後久世戸、於彼浦

奥松感得之由称之、副和歌可進上蔡裏之由有音信、則執進上之、

（永正五年四月十七日）真光院僧正自大山有音信事、

（永正六年閏八月十八日）真光院僧正入来、一兩日以前自賀州

上落云々

などの記事がある。文亀元年の記事は天橋立の九世戸の文珠參詣で感得した歌を天皇に奉ろうとする。尊海と朝廷の結び付きが窺われる。永正五年の「大山」はどこであろう。後の「あづまの道の記」には初めて富士山を見たところなので、ここでは相模國の大山ではあるまい。

「実隆公記」は欠本もあって、尊海の旅行の總てを見ることはできないが、当時の僧や公家が各地を旅行しており、尊海も同様で「あづま道の記」もそうした紀行の一つである。しかし土佐下向は単な

る旅行ではなく、別当としての赴任である。

尊海の土佐下向には如何なる誘因があつたであらうか。確かな資料はなく、あくまでも推測にすぎないが、次の三点を考えてみた。

第一は土佐一条氏の存在。前引の「再昌草」七月条のように、土佐国幡多庄に在る飛鳥井頼孝と同じ便で実隆に書状を送つたのであらう。「実隆公記」大永八年十月十一日条には「真光院来談、烟武士、長尾出雲連歌被見之」とある。一条垂相は前大納言房家、その家臣長尾出雲守の連歌に実隆の評を求めた。尊海と土佐一条氏の結び付きを示す資料はこの程度である。

しかし土佐一条氏と金剛福寺の因縁は深い。初代教房没後、家中の混乱を避けて、文明十五年（一四八三）二代房家は母に伴なわれ金剛福寺へ一時移住している。^{注10}また最近、金剛福寺の現住職長崎勝藏師が旧護摩堂の解体修理中に発見された繰出し位牌（小さな箱の一面が開けられていて、中に縦二十二センチ、横五センチほどの薄い板碑が二十一枚（元来は二十二枚か）があり、各板碑の表に戒名、裏に俗名・没年月日などが墨書されている）には歴代の土佐一条当主・御母・姫宮たちの名が記されている。

また尊海著「薩陀山縁起」の奥書には、

享禄壬辰仏涅槃前七日 依大檀越仰謹誌之

孤山羊僧尊海

とあり、近世の編纂である「南路志」は「按大檀越者一条房家公也、享禄壬辰者天文元年也」とする。^{注11}

第二は尊海の信仰。都を遠く離れたこのような辺境の地に住むのは、一つには僧侶としての精神的誘因、即ち信仰を考えねばなるまい。足摺岬の突端に位置する金剛福寺は、紀州の那智と並び称される補陀落界への靈地である。尊海の「薩陀山縁起」にも賀登上人の弟子日円坊の補陀落渡海の伝承が記されている。日円坊の類似の伝承は「長門本平家物語」巻四や、「とはすがたり」巻五にも見える。

尊海の場合、若くから座主を勤めた石山寺が観世音菩薩を本尊とする観音信仰の寺院であり、観世音菩薩の浄土補陀落界への憧憬、そして足摺山金剛福寺へと導かれたと思われる。前述の如く、その過程には、覚道法親王の淹頂など仁和寺における向後の心配もなくなったことから金剛福寺へ赴任した。その後も京都・土佐間を往復するが、大永七年、覚道法親王薨去によって再び新御室の人選問題が生じ、更に長路の往復を繰り返すこととなった。天文八年、任助法親王の入室、同十一年淹頂、総てを取り仕切った後、翌十二年十一月、尊海は足摺の地で入滅したのである。

第三は寺院経済との関連。これは全くの思い付きであり、他の例から考察しなければならないが、尊海の土佐下向は仁和寺の経済収入とは関係ないだろうかということである。当時、公家たちの中に

は積極的に各地の自領に下向し、年貢の調達を図る者があった。一条兼良の越前国足羽御厨下向や九条政基の和泉国日根庄直務などがそれである。寺院においても末寺に対する本寺の直務が行なわれ、本末関係による本寺への何らかの収入を確保しようとしたのではなからうか。

幡多庄の中心地、現在中村市には処々に土佐一条氏時代の遺跡があり、都を偲んで名付けられた「東山」の地名も残る。土佐一条氏の許に平穏であった幡多郡一帯には海上交易の本拠もあった。^{注12} 尊海は京都の文化の伝播者としても重宝がられたことであろう。前述の「嵯峨山縁起」だけでなく、天文五年には幡多郡大岐村（現在土佐清水市大岐）念西寺のため、「仁和寺殿院家真光院尊海^{勅進}沙門^{注13} 一卷」を残している。

以上、尊海と「あづまの道の記」について、多少の調査報告を交えて述べたのであるが、作者と作品には相入れない隔りを感じる。同じ人物が作者かと疑われる。狂歌または狂歌風な歌と詞書で綴られた紀行、一方、寺院運営に勤め、都を離れた辺境の寺に赴任する高僧。これについて次のように考えてみた。

まず紀行そのものが日常からの解放であり、和歌や連歌の世界ではなく狂歌や俳諧の世界に近いこと。尤も現代の旅行ではなく、中

世、特に戦国時代の旅行は厳しく恐ろしいものであり、尾張国田楽窪の歌のように山立（山賊）を怖れながらの道中である。しかし山立すら、無事通過すれば狂歌に詠まれてしまうのである。

次に尊海の多様性、というより中世の文化人の多様性というべきか。江戸時代、このような文芸は、深められ洗練されて、通とか粹とか穿^{うがち}と呼ばれるようになるのであろうが、「あづまの道の記」はまだまだそこまで浄化されていない。それだけに作者は種々の文体で筆致できる。中世はまだ専門化されていない世界があって、文学史上、決して有名でない真光院尊海にもその一端を見るのである。

注

1 長倉智恵雄氏の御教示による。

2 井上宗雄「中世歌壇史の研究 室町後期」昭47 明治書院 三八一頁にも配列の誤りについて指摘がある。

3 瀬本久雄「冷泉為和と今川氏輝・義元」『駿河の今川氏』六
昭57

4 山内氏関係史料については大隅信好氏より多くの御教示を得た。なお花嶋亭「乱世を生きた天方城主」昭56 が地元において刊行されている。

5 大塚勲氏の御教示による。なおほかに「実隆公記」大永四年九月十四日条「道芬自善光寺上洛……」、同大永六年正月廿九日条

「道芬・称意等来……」、実隆の歌日記というべき「再昌草」大永四年五月十四日条「道芬か弟子に恵賢といふ物侍し、駿河にて去年むなしくまかり成し……」、同享禄三年七月十二日条「道芬法師遠江国よりふみをこせて、よみをきたる歌とも書きあつめ点の事申たりし、すみをつけて返しつかはすとて……」などあって、道芬は上洛したことがあり、歌道に熱心であったことがわかる。

6 「石山寺の研究」一切経篇 昭53 法蔵館

7 梅津次郎「石山寺縁起絵について」日本絵巻物全集二二 昭41

角川書店、吉田友之「石山寺縁起絵七巻の歷程」日本絵巻物大

成一八 昭53 中央公論社ほか

8 「石山寺の研究」校倉聖教・古文書篇 前掲

9 井上宗雄「中世歌壇史の研究(前期後期)」前掲 一三四頁・二四八

頁

10 「中村市史」第六章土佐一条氏 昭44 中村市。以下高知県下

関係史料については広谷喜十郎氏より多くの御教示を得た。

11 武藤致和「南路志」高知県文教協会翻刻 昭35

12 山本大「勘合貿易と南路」『内海地域社会の史的研究』昭53

マツノ書店、下村效「戦国・織豊期の社会と文化」第二章第四

節「戦国期南路交易の発展」昭57 吉川弘文館

13 「土佐国古文叢」第六「高知県史」^{古代}_{中世}史料編 昭52 高知県

本稿は昭和五十八年十二月三日、神戸大学にて行なわれた和歌文学会関西例会での発表に加筆したものである。「あづまの道の記」の翻刻では祐徳稻荷神社、諸本に關しては国文学研究資料館のご厚意を得た。静岡県周智郡森町の現地調査では大隅信好氏・大塚勲氏・長倉智恵雄氏、石山寺の文献調査では田中稔氏・奥田勲氏、高知県立図書館の文献調査では広谷喜十郎氏、高知県中村市の現地調査では山本清水氏のお世話になった。特に金剛福寺では住職長崎勝憲師より足摺岬の尖端まで御案内いただき、種々の御教示をいただいた。深く感謝する次第である。